

黒田節一編新琵琶楽団・琴、笛、立方 特別  
出演印度舞踊一神原竜磨、英子。

古典芸能 兵庫県文化祭十月五日(木)  
のつどい 夕六時神戸市泉民小劇場、主  
催兵庫県 盲僧琵琶一松岡旭岡、柴田旭堂、  
田中旭昇、松岡旭文、伊藤旭暢、富樫旭桂、  
宮垣旭璋、木庭旭山、浜本旭好 重衡一久内  
舟水 吉野山蔵古一旭山、旭璋、旭好・絃旭  
昇、旭文、旭暢、小絃旭桂・立方 屋島回願  
一三宿蓮水 若き敦盛一池田旭榮、中村旭昭、  
植田旭心、国田旭純・絃旭堂、旭昶、旭晶、  
旭海、小絃旭寿・立方 大橋公一柴田旭堂、  
秋風故郷の山一旭岡、旭昇、旭文・絃旭桂、  
旭暢、旭山、旭璋、小絃旭好、外に淡路人形  
芝居、兩山進流声明、一絃琴。

京都琵琶協会 秋晴れの爽やかな十月  
十月定期茶話会 七日(土)午後一時から  
神戸市の泉遺族会館にて会員安住旭康女史の  
肝入りで定期茶話会を開催、会員の外四明会  
から長谷川博章、藤崎天光両氏が来会された。  
川中島一平井、壺の口一古谷、西郷隆盛一  
水内、白虎隊一長谷川、都落ち一矢吹、禅師  
と正宗(白一安住、岡一田中、伽羅の兜一梅  
原。(伊吹、藤崎、戸倉三氏演奏なし)  
終って安住女史心尽しの御馳走を頂き、秋  
季演奏会の決算報告を承認、十一月茶話会の  
相談などをして六時四十分解散した。

吟詠吟舞菊水流 十月十日(休)正午東  
秋の集い 京葛飾区公会堂にて菊水  
流本部主催の元上記開催、菅根悠光、永田  
氷泥両主脳を始め多数の会員により吟詠吟舞  
九十四番が披露されたがその内「源平の賦」  
(立方九、独吟二、地吟二、尺八、十七絃)

に水藤錦樓、新部桜水、藤波桜華、津谷桜佳  
の四氏、「石室丸」に染名洲聖氏、「白虎隊」  
に望月啞江氏がそれぞれ琵琶共演、また鈴木  
流泉氏が「琵琶塚」を独演し多彩な顔ぶれで  
極めて盛会裡に八時閉会した。

○第十一回琵琶と詩吟詩舞の会 十月二十  
九日(日)十二時半、西宮市立夙川公民館  
松下ホール、主催三浦蓮水会(西宮市民文  
化祭参加)。京阪神の名手賛助出演  
○晴風会秋季演奏大会 十一月三日(休)  
十時一十六時半、東京中野区公会堂。水藤  
錦樓、谷暉水、鈴木流泉、押川旭葉各氏賛  
助出演。(会主は新曲設楽原発表)

○日本正調筑前琵琶秋季演奏大会 十一月  
五日(日)正午、吹田市市民会館  
○水藤錦樓リサイタル 十一月十日(金)  
夕、東京大手町日経ホール(別掲参照)  
○東大阪旭会秋季演奏会 十一月十二日(日)  
正午、東大阪市額田会館。(東大阪市民  
文化祭参加)。兼故中沢旭洋氏追悼会  
○京都琵琶協会十一月定期茶話会 十一月  
十五日(水)午後一時、京阪電車浜大津駅  
集合(都座を避け坂本の日吉神社附近にて  
紅葉狩を兼ねて開催)  
○赤心会秋の大会 十一月十八日(土)午  
前十時、静岡市駿府町泉婦人会館ホール。  
静岡、東京、京都、浜松の名手賛助出演。  
○日本琵琶振興会十一月例会 十一月二十  
八日(日)正午、東京渋谷区千駄ヶ谷鳩森  
八幡宮宴会場。



京絃社移転  
このほど左記に社屋が落成しましたの  
で十月二十九日に移転いたします。  
高槻市津之江北町一の一三三

(住居改称)  
京都府乙訓郡向日町が去る十月一日から市  
制施行に伴い左記の通り住居が改称された。  
○古谷寛水氏 向日市寺戸町二枚田四  
○梅原旭濤女史 向日市日鷲冠井町  
山端二

(訂正)  
京絃第二二〇号三頁「狂酔亭漫録(第七十  
七号)」は(第八十三号)の誤植  
(計報)  
清水史水(力太郎)氏 本年春以来加  
療中のところ薬石効なく九月十七日午前〇時  
五十五分胃癌のため宗野病院に於て逝去、享  
年七十。氏は錦心流総伝の芸熱心家で京阪神  
各流派琵琶人の研究と親睦を目的とする「舞  
子会」を主宰して斯界に貢献した。謹んで哀  
悼の意を表し御冥福を祈る。(明石市鳥羽字  
宮西五七七加納荘内。嗣子清水泰年氏)

昭和四十七年十一月一日発行(非売品)  
編集者 植村 真水  
発行所 京絃社  
高槻市津之江北町一の一三三  
電話 (転設手続中)

琵琶  
関紙

京

絃

第二二一号 京絃社

信濃地の観光地

川中島合戦

(下)



辻 旭城

さて十日朝卯の刻(午前六時)、朝霧が次  
第に晴れ渡ると、思いがけない越後の大軍が  
甲軍の眼前に展開しているの信玄も驚いた。  
しかし流石百戦錬磨の信玄、些かも動ずる気  
色なく敵情偵察を命じ、越軍の車懸りの陣に  
対して備えを鶴翼に立て直した。車懸りの陣  
備とは、中心の旗本を車の軸として幾つもの  
横隊が、軸と車軸を繋ぐ横木が廻転する如く、  
次ぎから次ぎへと新手段に敵におどろかせる戦  
法である。

そして甲軍の応急陣形が未だ終るか終らぬ  
かに、越軍は調をあげて斬りかかって来た。  
越軍の先鋒柿崎和泉守景家が大燕青の大纒を  
陣頭に押立て、典厩信繁の隊に突入蹂躪した。  
信繁は信玄の弟で、かつては父信虎が長子の  
信玄をさしおいて跡目にしようとした人物で  
あるが、信繁は兄信玄を助け主将の一人とし  
て参加していたのである。

典厩隊もよく戦ったが遂に崩れた。神明附  
近に墮取っていた甲将山県景景の一隊は、こ

れを見て急遽前進、柿崎隊の左側から猛烈に  
攻めかゝったため形勢は一変し、また両角隊  
は優勢な本庄隊に当りかねていた時、更に右  
側から越軍安田隊の攻撃を受けて苦戦に陥り、  
副将両角虎定はついに討死した。  
一方山本勘介晴幸は「今日の作戦に大きな  
顛覆を生じ、既に信繁を始め両角虎定等將兵  
の討たれる者数知れず、形勢危機に陥入った  
のは自分の智略の足りぬところ」と責を感じ、  
味方の最も危険な岡附近に進出して奮戦、身  
に八十六箇所の傷を負い壮烈な討死をした。  
ここに越軍は迂回軍の戦場到着前に甲軍を  
撃破しようとしたが、甲軍は迂回軍の到着迄  
は破られじと奮戦、東西古今を通じて稀に見  
る大激戦となったのである。

両軍の大決戦

甲軍の陣形が乱れるのを見て、謙信は一気  
に勝負を決せんと信玄の本陣を強襲した。こ  
れが琵琶、映画などを後世に残る川中島の

合戦で、こゝで謙信、信玄の一騎討ちが展  
開される。

この時の謙信のいたちは、紺糸織の鎧に  
萌黄緞子の胴肩衣をつけ、金の星兜の上を立  
鳥帽子の白妙練絹をもって行人包とし、二尺  
四寸五分順慶長光の太刀を抜き、月毛の名馬  
放生に跨って麾下の剛兵十二騎をひっさげ、  
それまで勇敢に備えを崩さず持ち耐えていた  
右備の武田太郎義信の隊を突き崩して信玄の  
本陣を衝き、両旗本の接戦となった。

信玄は諷法性性の兜、黒糸織の鎧の上に緋  
の法衣をつけ、軍配団扇を右手に持って悠然  
と床几に寄り指揮をしていた。諷法性旗の  
許にある信玄の姿を見つけた謙信は、只一騎  
駆けよりさま馬上から斬りつけた。この襲撃  
に信玄は刀を抜き暇なく、手にした草履で謙  
信の刀を発止と受けとめたが、二の太刀は信  
玄の腕を傷つけ、三の太刀は肩先に斬込んだ。  
この時信玄の仲間頭原大隅守虎吉は、傍らに  
あった信玄の鎧青貝の長柄をとって、馬上の  
謙信めがけて只一突きと突き出したが焦って  
外れ、返す鎧で謙信を叩き落とそうと打下し  
た。然しこれも又外れて馬の三途をしたゝか  
に打ったため、馬は驚き跳ね上ってその場を  
狂奔し去り、信玄は危く虎口を逃れた。甲軍  
はこの単騎の法師武者が誰と知る由もなかつ  
たが、後に謙信だったと知り一同大いに驚い  
たと物の本に記るされている。

戦のその後

両軍の旗本の近接する大乱戦が展開され、武田軍があわや潰えようとする直前、一万二千の迂回軍が姿を現した。この迂回軍高坂昌信ら、前夜妻女山に向ったのだが山路は険しく、しかも濃霧に鎖されて以外に時を費し、

かかねて本軍援護のため小森に陣取っていた越軍甘粕の殿軍は、流れを乱して千曲川を渡る高坂軍に、川辺の芦の間から百挺の鉄砲で一斉射撃をしたので少なからず死傷者を出したが、勇敢に戦いつつ、戦場に馳せ向い、越軍の側面と背後から喊の声をあげて攻撃した。形勢俄かに一変し、甲軍の本隊も士気振る

犀川は千曲川に比し流れが急で水深く、渡河で溺れる者も少くなかったが、殿軍甘粕隊の善戦により辛うじて敗軍を収集、善光寺で軍を整え越後に引上げた。甲軍も犀川の北まで追撃できなかった。而して川中島の大合戦も終り、午後三時には全く越軍を撃退するに至ったので、信玄は全軍を八幡原に集めて却した。

祝盃をあげ、海津城に引上げた。この戦は古今稀にみる激戦で、甲軍の戦死者三千二百余、越軍もおよそ三千百の戦死者を出したという。戦の勝敗については、甲州の妙法寺記に「景虎人数悉く討死いたされ申し候」とあり、武田方の大勝利という者と、謙信感状に「凶徒数千騎討捕得大利年来遠本望」云々とあり、越軍の大勝利と称する者もあるが、公平に見れば戦の前半は上杉方、後半は武田勢の勝利と云うべきであろう。

こうして甲越両軍の勝敗は、永禄七年(一五六四)まで実に十二年間に亘り、何回もの激闘に拘らず遂に決することなく、謙信が越中、能登進出に転じたのと前後して、信玄は永禄十年に三方ヶ原で撃破し、正に尾張に入ろうとして天正元年(一五七三)野田攻城中に五十三才で没し、謙信また上洛の準備をしなから天正六年四十九才で死去した。この二傑の何れかともう十年永生きしていたら、信長、秀吉の全国統一も容易ではなかつたろうし、自然歴史も大きく変っていたことであろう。(終)

大阪落城と江戸幕府(一〇) 白石 庸之助 慶安反逆事件 ひしひしと大通りから小路を埋めつくした御用提灯。無数に家々の屋根へかけられた梯子から蟻のように捕手達が駆け上る。大江戸の闇の中に満身創痍、槍を杖に立つ丸橋忠弥の闇の中に満身創痍、槍を杖に立つ丸橋忠弥慶安太平記という頭で浮かぶのがこの場面である。宝蔵院流槍の名手、お茶の水に道場をかまえた酒好きの牢人。この丸橋と由比正雪が手を組んだとき、牢人三千余を巻き込んだ一大謀反の計画が成立した。 由比正雪は慶長十年(一六〇五)駿河の由比の農業兼染め物屋に生まれた。出世を望んだ彼は江戸へ出て、話上手なところから「太平記」読みの講釈師となったが、正雪は補正成を厚く尊敬し、桶流の軍学者になったと云われる。また桶家の子孫であるとも宣伝し、反乱の時には菊水の旗印を使っている。悲劇の将軍補正成と自分を結びつけるという抜け目のなさが、太平の世に容易に受入れられた。正雪は神田連雀町の妻通りに居を構え軍法の教授所を開いた。そして彼の名が上るにつれて各大名から入門の申込みがあつたが、下野の板倉重矩だけを弟子としただけで、その他は総て断つた。従つて後年この反乱に紀州

寸言(18) 寺田とせ 維新の勤皇志士達を助けた京都伏見の旅館寺田屋の女将。義侠心に富むとせは薩に陽に坂本竜馬を始め多くの浪士達をかばつた。薩摩藩の有馬新七ら九人が死んだのを世に寺田屋騒動という。明治四十一年没。

の徳川頼宣が関係していると云われるが、これも実は正雪一流のハッタリであつた。慶安四年(一六五二)四月二十三日三代将軍家光逝去、あとを十一才の家綱が継ぐことになったが、この好機を正雪らは見逃がさず事を起こした。彼等は三方に分れ、丸橋は風の強い日に幕府の火薬庫に火を放つて江戸城周辺を焼払い、やってくる老中達を殺して幼い將軍を捕虜にする。一方正雪は駿府(静岡)に居て丸橋の拳兵と同時に駿府で立ち上り、家康の残した金銀財宝の保管場久能山に立籠る。更に大阪へは金井半兵衛を派遣し、四天王寺で江戸、駿府に呼応して兵を挙げさせる。全く大規模な計画であつた。加わる牢人三千余、前代未聞のこの大計画は然し日の目を見ずに挫折し、七月二十三日丸橋の逮捕に続いて、二十五日には正雪は駿府で役人包围の中で自刃して果てた。計画の発覚は丸橋が酒席で妻子に洩らした結果と云われる。

人相書によれば「背小さく色白く、髪黒く眼くりくりとして額短かく、唇広く総髪」という神経質らしい正雪がこの大計画を建て、三千余も牢人が集つたのは如何なる条件のもとに於てであつたのだろうか。彼等は度重なる戦乱で主を失い、戦の間は転々と武力を売物にしてきた者達で、それが江戸幕府の安定期になると何れの大名も兵力不必要となり、且幕府の手によって豊臣方の多くの大名が滅封や取潰しになつて、牢人の数は益々増加したのである。彼等には将来の希望もなく、加

うるに多少腕を持つている。従つて泰平の世に於ける騒乱待望論が生れ来る訳である。正雪は遺言に曰く、幕府を倒す意志はなかつた。その政道を改革する為であつたと。慶安事件の翌承応元年にも牢人の謀反が発覚している。智恵伊豆と云われた松平伊豆守は牢人弾圧政策を推進した人物であつたが、度重なる牢人の反乱が続出したので、その後牢人取締りを緩和し就職斡旋をもするようになった。

慶安事件の年の夏、江戸の街を托鉢する世捨人があつた。どこか慣れないお経ではあるが、門前の小僧という訳でもなく人品卑しからず、一途に思いつめたものゝ迫力がその身辺にみまぎっている。 この僧こそ三河(愛知県)刈谷の城主松平能登守定政であつた。正雪事件の発覚する二週間前の七月九日、松平定政は意見書を老中に提出して上野寛永寺に於て髪を下ろした。意見書で定政は、現在の表面的天下泰平は全く見せかけに過ぎず、武士、町人、百姓を問わず内実は困窮の極にある。自らの領地三千石と武具一切を幕府に献上するから、困っている旗本牢人達を救う資金に使つて欲しい。たとえ小禄とは云え大名から一介の托鉢坊主に身を落とした定政の意見書は、基本的に当時の松平信綱の施政方針に対する痛烈な批判であつた。正雪もこの定政の意見書を取上げなかつたことを難じているのであつた。(未完)

47年度芸術祭参加 水藤錦穰リサイタル 錦びわ 琵琶道50年にちなんで とき 昭和47年11月10日(金) 6時半より ところ 東京大手町 日経ホール (入場料) (A) 1,500円 (B) 1,000円 ① 曲垣平九郎 錦穰 ④ 屋島懐古 錦穰 ② 耳なし芳一 錦穰 新部桜水・藤波桜華 津谷悦佳 戸室清山 (尺八) 国重栄美 ③ しぐれ曾我 錦穰 (尺八) 堀井小二郎 (十七絃) 後援 日本琵琶楽協会

新曲建礼門院右京大夫 水藤五郎 作詞 水藤錦穰 作曲 訪ぬれば 秋深みゆく大原の里 思いて迎る山里に 水藤五郎 作詞 水藤錦穰 作曲

梢に響く山おろし 千草にすたく虫の音も  
悲しさをこそ添ふるなれ  
今や夢昔や夢と迷はれて  
いかに思へどうつともなし

我や宮居に上りしは 桜の花の咲きそむる  
承安四年の春なれや 時は平家の御代にして  
御ものゝくに装いし 女院の御座所は華やきぬ  
いとまばゆき御直衣 高倉帝の御姿  
時折見たて参らせし 女院の御生母二位様と  
御睦まじき語りや よそ乍ら見る嬉しさは  
我が身とさへも思われる琴のうたぐさ笛の音や  
合わす琵琶の音楽しけり重盛卿の催せし  
菊合せなるその折に 出合ひし平家の公達等  
なかに一きわ忘れ得ぬ資盛様の御姿  
靡ちる尾花に涙して 知りそむ恋はいと深み  
文の歌草交わしつゝ 降り積りたる朝の雪  
踏み分けはるはる参らせしそのやさしさや御情  
つもりつもりし心ばえ忍ぶの里にまよふなり  
時りつりゆき末法のたぐいも知らぬこととを  
経ぬる我身ぞうとましき月は源氏に傾けは  
宗盛卿を始めとし わが思い人資盛卿  
平家の方々落ち給ふ その都落ち明日にして  
最後の思いを語らんとしはし別れを惜しみけり  
いづこにていかなることを思ひつゝ

今宵の月に袖しほるらむ 春風寒き瘦の浦  
天曆二年弥生の月 波に乗りたる源氏の水軍一氣に雄を決せんと  
平家めがけて漕ぎよすれば今日を最後の船戦  
教盛卿や知盛卿 平家の一門力を合わせ  
必死の思いで防ぎ給うされど潮路にさからへず

次第に迫る敵船に 哀れ二位様先帝を  
抱きてくぐる波の底 女院もつゞき参らせて  
門脇平の教盛卿 経盛卿の御兄弟  
手を取り合せて入り給うさてこそ今は待てば  
武運も尽きし今生に名残りもなしと金銀大刀を  
打棄て給ひ資盛様 従弟行盛卿の手を取りて  
鎧の袖に礎をそへて 浮ぶ瀬もなき瀬戸の里  
壺の浦の波の中 心静かに入り給ふ  
救ふなる誓ひ頼みて写しおく  
必ず六つの道しるべせよ

あゝ忘れ得ぬその人やゆかりの人々今はなく  
たゞ手枕の夢の影 しのみしびのびて過しゆく  
憂き身は一つにあらぬとも思ひてたゞまらせし  
女院の在す大原の里やがて暮れゆき鐘の音も  
四方に哀れを伝ふればしはしの夢もさめぬらん  
寂光院にぞ急ぎけり (四七・五・一)

### 狂醉亭漫録(第八十四)

#### 討入義士の款待(一)

古谷 寛水

赤穂事件も茲数年間に涉り飛々乍ら仇討本  
懐まで記述したが、其後の動静から切腹まで  
の結末を執筆する時期が来たようである。  
義士達が討入後四大名に預けられた事は既  
に本年一月号にて記載したが、其後の待遇に  
就ては、先ず四家の中では筆頭格の細川家の  
模様からお知らせする。

水を注いだとある。

細川邸に入った翌日から、同志中の元老で  
ある原惣右衛門が「覚」と題して執筆した討  
入の次第を詳細に記述した一文が残って居り、  
真実を語る貴重な文獻であるが、何分非常な  
長文で、明治版の本で菊判約七頁あり、到底  
此処で紹介出来ないのは遺憾である。

細川家の饗応は実に豪華で連日三度共二汁  
五菜が内容を取替え引替え出るので、流石に  
義士達も濃味に食傷し、時には玄飯塩鰯を恋  
う様になり、大石が代表して細川家中の堀内  
伝右衛門に対し、品数を減じ内容を惣菜向料  
理に変更する様申入れたが、堀内も其意を了  
承し乍らも君命を楯に承知せず、兎に角料理  
方にも通じたが、之も君命とて拒絶された。

然し不思議な事に十二月十八日一日のみは  
全部精進に変わったので其理由を尋ねると、主  
人越中守が自から潔斎して義士一同の助命を  
神明に祈願し、其為の精進料理と判明し、殊  
に之を知った堀内が連日愛宕の社に日参し義  
士の助命を祈願したとの事、之を聞き義士一  
同は其誠意に只管感泣したとある。

越中守の心情は、萬一義士助命が叶った節  
は武士の模範として、厚禄を以て一同を召抱  
えたい希望があった様である。

細川邸の広間に唐紙を以て二室に別れ、上  
の間に年長者を、下の間に若年組を收容  
したが、この滞在中に種々逸話が生まれた。  
その二三を摘録すると  
俳人春帆として知られた富森助右衛門は、

或時傍らの小屏風に在る親鸞が雛を育てる絵  
を見て「一家一身の事等断念し乍らも、唯今  
此の屏風を拜見して、当年二歳の我子を出  
し不惑さを感じます。凡夫の浅ましき心外  
の至り」と潸然と落涙し  
旅人の宿りせん野に霜降らば  
我兎に羽ぐくめ天の田鶴むら

の古歌を吟じたとある。其後元禄十六年元旦  
を迎え、細川家好意の年酒に陶然として  
今日も春 駈かしからぬ寝武士哉  
「拙者等今般の一挙は、定めて方々の御批  
判もあらん。此処に列席の者は概ね小身者の  
みにて、当初奥野將監等は何かと相談致し、  
赤穂に於ては両人名義にて御目付衆に書面を  
差上げ、其後兩人宛の御書さへ下され、打連  
れて御当地へ御礼に参上した程にて、御老中  
方にも名を知られた者、其他進藤源四郎、  
河村伝兵衛、小原源五左衛門等申す者も、此  
処に居る原惣右衛門より上席致し、佐々小左  
衛門等も此吉田忠左衛門より上位の者、一挙  
に近付き皆意見を交へ申しておさる。其中に  
は拙者親族さへ交り、誠に御恥かしき次第」  
と慨然たるもの之を久しうした。とある。

大石は大晦日に除夜の鐘を聞きつゝ  
ながらへて花を待つべき身ならねど  
なお惜しまるゝ歳の暮哉  
原惣右衛門も暮の立春に一首を詠じた。

藩主細川越中守綱利は討入直後の十五日、  
殿中に於て大石始め十七名をお預けの沙汰を  
受けるや、受取には自身出馬を申出た程に同  
情的であり、同家の待遇は懇切を極めた。  
仙石邸を發してからの途中護送の様子は既  
に記したが、手負いの義士には駕籠の動揺を  
制する等の注意を払い、丑の上刻即ち午前二  
時頃一同は高輪の細川本邸に到着した。  
太守は宵から一睡もせず之を待受け広間を  
清掃し一同を導き入れ、直に自ら其席に出坐  
して「此度の一挙誠に神妙、当方士共充分附  
け置けば、諸事遠慮なく申聞けられよ」と挨拶し  
「空腹ならん、早く膳部を」と申付け行  
届いた措置であった。因みに主君自身挨拶し  
たのは四家の内では細川家のみであった。

此十七人の為に新調された小袖三襲から、  
上帯下帯は時々取替えられ、用紙碗箱は支給  
されて発信は自由で、膳部は二汁五菜の盛饌  
で昼と夜は酒が添えられた。お八つには見事  
な菓子、夜就寝前には薬酒と称して酒が下賜  
され上戸の連中は大喜び、又寒中として金網掛  
けた火鉢、鏡前付の炬燵が夫々に支給された。  
又家臣中の名譽の者十九名を撰んで接待役と  
し万端の世話をなし、書籍は細川家秘蔵の平  
家物語、太平記、三國志等が提供され、老人  
には眼鏡まで賜った。  
風呂は一人一人に水から沸した湯を賜った  
が、余りの勿体なさ義士達から申出、其後  
は二三人毎に汲替える事になった。便所へ通  
り時は接待の小姓がつき、杓を取って手洗の

思いきや今朝立つ春にながらへて  
羊の歩み尚待たんとは  
翌元禄十六年の干支は癸未に当るので、羊の  
歩みと詠じたので彼の心境想うべきである。  
細川邸内十七名の分宿制当を記すと  
上の間九名  
大石内蔵助 原惣右衛門 間瀬久太夫  
小野寺十内 堀部弥兵衛 吉田忠左衛門  
間喜兵衛 早水藤左衛門 片岡源五右衛門  
下の間八名  
近松勘六 潮田又之丞 富森助右衛門  
赤垣源蔵 奥田弥太夫 大石瀬左衛門  
磯良十郎左衛門 矢田五郎右衛門  
以上細川家に於ける義士待遇の次第を略述  
したが、他の三家の様子は次号で記します。

### 秋の蝶

滝原流石

ひとつ居て蚊の疎ましや秋の蚊帳  
焼栗の音を採して炬に得たり  
習々と風を鳴らして竹の春  
寂寞を添水が刻む詩仙堂  
昏れ急ぐ我れに明るき秋の蝶  
月の出に尾花は黙す曠野にて



### 琵琶の保存と修理

鈴木流泉

古い筑前琵琶(桐材)の表面を美しく仕上げの方法

この方法は、誰でもできますから、是非おためしください。

一、仕上げに使用する材料

○黄色砥の粉 ○胡粉またはチタン

○木工用セメダイン ○ビニールテープ

○ペーパー||サンドペーパー|| (粒子の細かい物と荒い物各一枚)

二、材料の配合及び作り方(琵琶一面分)

○砥の粉1大匙1パイ ○胡粉1小匙1パイ(チタンの場合は小匙半分)

○木工用セメダイン1小匙1パイ半

○水1大匙1パイ

以上をよく練り合せ、堅練りにします。

一、仕上げ方法

(1) まづビニールテープで、桐以外の材質の部分を書きます。

次に粒子の荒いペーパーで、桐の面の凹凸を磨滅して平面にします。

(2) 深い凹みは前記「堅練りの配合原料」を塗り込んで平面にします。そして、そのまゝ半日(六時間以上)乾燥します。

(3) よく乾かしてから、巾三センチ、長さ十二センチ位の平らかな木の板に荒いペーパーを糊で貼りつけ、前に塗り込んだ箇所を更に平らになるまでそのペーパーで磨滅します。

(4) さて仕上げです。

「材料の配合及び作り方」の項に記したその原料を、ここに於ては堅練りにせず、塗装してよい程度にまで水を加えて薄め、平刷毛で平らに塗り、一時間ほど置くと乾きますから、その後で、今度は粒子の細かいペーパーですすり、もう一度平刷毛で塗ります(つまり二度塗りするわけです)。それが乾いたら再び細かい粒子のペーパーですすり、最後にタオルのよりの布で磨く。これで出来上りです。

附記：上記材料の中で入手し難い物がありましたら、左記へハガキでお申し下さりば無料で進呈いたします。

越谷市大成町一―二二九二 日本琵琶振興会々長鈴木流泉

二月から肝臓障害で勅使河原病院に入院療養中、小康を得て八月一旦退院し引続き通院加療中のところ病革まり九月三十日午後十時自宅(名古屋市中区和区錦町二丁目五ノ三)に於て逝去された。享年七十一。葬儀は十月三日同市瑞穂区の竜興寺で社葬別式が行われ、政財界名士等の外琵琶人多数焼香、特に東京から山口速水、前田秋声、友吉澄水、桑名洲聖、平井洲誠各氏が懇々葬儀に参列し、又各地の琵琶人から沢山の弔電が寄せられた。氏は永年に亘り一水会名古屋支部長をつとめて会員の融和を計り、又尾州藝会を組織して琵琶界の発展に尽すなどその功績は誠に大で、今この計に接して転々惜別の情に耐えな。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

大阪琵琶同好会 ① 八月二十七日大阪の活 躍 市立東住吉老人福祉センターで敬老慰問演奏会を開催し列席者一同を喜ばせた。(演奏者) 藤野鳳嬢、養老駿水、島津旭星、吉川正風、宮之原聖水、矢野旭信、辻旭城、秋口旭伝、大西旭明、中山嵐水、美登里進水、石橋旭嬢。

② 同好会長石橋旭嬢氏は九月一日午後六時五十分から放映中の朝日放送TV枚方菊人形「平家物語」の一環として琵琶放送中。

③ 九月十五日昼京都府与謝郡社界福祉協議会主催の敬老慰問大会が加悦小学校講堂で

開催され招聘を受けて左の通り演奏、百余の老人達から感謝され盛会であった。若き教諭石橋旭嬢、那智の飛行一大西旭明、柳の精一若宮旭登、貧者の一燈一美登里進水、(外に狂言、奇術、民謡あり)

### 双鶴流家元

去る三月から西印度度方天津八千代女史 面親善演奏旅行を続け八月末帰国の女史は来年三月ネパール国王祝賀式祝賀行事の一環として日本ネパール両国協賛の下に同国立劇場に於て琵琶演奏会を開催される事に決定した由であるが遠く海のかなたへの琵琶のPRは誠に結構な事である。

### 一水会多摩支部

九月十日(日)昼小金井市福祉会館で開催、伊藤磐水外五氏合奏「西郷隆盛」並に舟井慶一、奥野静軒、白虎隊村上孫吾、城山一中島燦水、井伊大老石井效水、金剛石一藤宮優水、西郷隆盛伊藤磐水、菅公清水孫水、吹雪の敵一松田殊水、修善寺物語一杉山旗水、松の廊下一加藤喜水、伊豆の御難一中村修水、奴賊一坂本銅道各氏の演奏で盛況を呈した。

### 九月例会

九月十七日(日)昼東京芝の粟根で開催。月下の輝一今村潮舟、武蔵野一堀越素舟、秘曲数齋彈奏一辻靖剛、菅公一八束一降、影義隊一清川嵐水、海陽江一鈴木鶴岡、木崎原一池野谷吟地、老蘇の森一遠藤鶴東、両中尉一生川鶴王、錦の御旗一柏木篤道、湖水渡一仲川秀邦、吉野落(竹)一佐々木精、城山一小村峰舟、岩崎谷一栗原雨竹、関東大震災一三木松嶺、竜の口一前田秋声、川中島一太塚岳峻、物狂一古家絃風、

### 稲葉葵水(新一)氏

錦心流一水会名古屋支部長兼尾州会長(株式会社ロークス取締役会長)の同氏は、去

### 三位研修同志会

琵琶道の真髓絃心歌の創立第一回例会 三位一体を練磨修養する目的を以て大村、坂本、山崎三首脳の提唱による同志会がこの度発足しその第一回例会を九月二十三日(祭)午後一時から七時まで三府市上連雀地区公会堂で開催、盛会であった。

### 北海道神宮

九月二十四日(日)十時半札幌市理容美容センター、後援NHK。後寛(竹)大友城水、坂本竜馬一草薙常水、棄児行一室谷幹水、本能寺一松森岳舟、五条橋一加藤夕水、伊豆の御難一安達弦水、菅公一小野容水、湖水乗切一小林壽水、新撰組一中井岳鳳、松の廊下一上杉楓水、石童丸一北尊水、影義隊一広川岳楓、新曲白虎隊一木村長水、常陸丸一金子天香、茨木一山崎紅水、錦御旗一米沢環水、後寛一内山稼水、外に詩吟剣詩舞三十題。

### 日本琵琶振興会

九月二十四日(日)午九時 後一時八時、東京千駄ヶ谷鳩森八幡宮宴会場で開催、参会者交互演奏の外京都三美会主田中旭法氏「筑前琵琶と私」、望月啞江氏「古詩琵琶」と琵琶歌謡と江との照合」の講演があり盛会裡に終始した。

### 伝統芸術

九月二十九日(金)正午一四時半、主催玄象会、後援日

### 本琵琶協外

影義隊一清川嵐舟、王昭君一鈴木鶴岡、海陽江一太塚岳峻、石童丸一桑名洲聖、鉢の木一大館洲楓、坂崎出羽守一浅野晴風、小栗栖一山崎旭、茨木一弘沢雨水、外に地唄、尺八、新内、落語、等、講談等。

### 藤巻旭鴻

教授所開設四十周年を記念 演奏 会して九月三十日(土)十一時から東京大手町大和証券ホールに於て旭鴻後援会の後援の下に開催、盛会。常陸丸一柴田文子、良寛さん一藤巻旭鴻、藤巻智恵子、旭陽 巡礼お徳一藤巻旭鴻、絃旭彰、旭晶 羅生門一橋上旭英、上原旭映、絃旭紅、北の庄一太野旭翠、藤巻旭星、絃旭鴻、華道華の恵み一古川旭冷、内田旭章、絃旭静、旭花都、旭哉、旭史、生花横川社中、秋風故郷山一黒田旭映、絃旭鴻、旭彰、笛、立方、茶道松風の曲一一条旭哉、絃旭陽、旭川、旭晶、旭石、点前 粟津の露一太西旭好、絃旭鴻、塚原下伝一松元旭川、加藤清正一南崎旭藤、絃旭利、石童丸一水藤五郎、山吹の夢一松沢旭晶、絃旭陽、旭彰、立方、天の羽衣一谷口旭節、青山旭光、林田旭史、絃旭堂、旭静、旭清、笛、立方、網籠一藤巻旭彰、吉田旭泉、絃旭鴻、旭光、小絃旭成、对王丸一藤巻旭陽、に惚ぶ一宮川旭花都、絃旭粧、旭静、笛、石田三成一野田旭条、平泉一古田耕水、輝鏡司、吾妻江風、藤巻旭鴻、水藤錦嶺、仲川秀邦、都錦穂、立方、唐人お吉一樋口旭清、絃旭鴻、笛、大桶公一太津旭紅、千姫一柿木旭利、斎藤旭章、絃旭鴻、笛、ジャングルの月一(横井庄一)一中村旭園、若き教諭一原島旭粧、絃旭園、旭利、笛、立方、吉野山懐古一小原旭成、絃旭堂、旭静、旭節、立方、懐古一兒一柴田旭堂、旭静、旭節、立方、懐古一兒一柴田旭堂、二〇三高地一藤巻旭鴻、耳な